

# 春

# 燈



5  
月号

## 万太郎の句

# 神田川祭の中を流れけり

句集『草の丈』 大正十四年

高名な万太郎の句として、俳句初心者であった私が、先ず惹かれたのがこの一句だった。前書にある通り裏がある句で又、祭と川の動と静を対比させた作りと思う。

その頃の私は逆に祭で湧きかえる町並の熱気に圧されて、その真ん中を流れる川まで沸騰し始めた様な光景を想像させられ、勝手に感動していたものだ。そして今もこの直截な表現の一句を好もしく素晴らしいと思つてゐる。

小石 珠子

## 万太郎の句

# 小でまりの花に風いで來りけり

句集『流寓抄以後』昭和三十八年

万太郎師が急逝されたその日、安住先生は師のお伴をして、慶応病院に入院中の俳人稲垣きくのを見舞った。途中ある屋敷の庭に小でまりの花を見つけた師は、この句を呟かれたという。正に「俳句は作るものではなく、浮かぶもの」と言うに相応しい句である。表現は、シンプルであればある程そこに多くのものを含み持たせることができる。「南無阿弥陀仏」の念仏もまた然り。

本 多 遊 方

# 西ヶ原日記 (十八)

鈴木榮子

交 易 や 物 資 管 理 の 春 土 の 印  
紡 錘 車 春 衣 腰 布 つ む ぎ け む  
オ リ エ ン ト 展 の 春 陰 に 探 す 貞 操 帯

樹脂乳香香水として古代びと  
殉葬てふ痛ましきことたんぽぽ黄  
春の風邪ルル三錠が持薬にて  
花種蒔く袋渡して咲くを待つ  
彼岸寺墓前に供ふ記念号  
染井吉野夜目にも白く咲き上る  
壬生念仏うたにうたつて未だ訪はず

冬  
衣

西村勝美

一列となりて畦行く寒念仏  
報はるることを望まず木の葉髪  
吹き荒れて枯野の果ての二日月  
麦の芽の二寸が程を初東風す  
梅が香にしろき月夜となりしかな  
日脚伸びや風垣解きし花畠  
春雷や遠嶺に曳きし雲一朵  
一と村は雨に沈みて柳の芽  
草深く住むや燕に軒貸して  
田普請の煙地を這ふ四温かな

## 江戸三春

三宅文子

絵草子屋覗いてゆきし子猫かな  
風光る錦絵はみ出す相撲取  
傾城の恋の達引花月夜  
東風吹くやただそれだけの遊女の死  
百逢ふは百はも淋し百千鳥  
白魚や江戸指物のくるひなき  
虚と実のあはひに生くやたびら雪  
手ぬぐひの吉原つなぎ春深む  
越後屋の出入り千人遅日かな  
八百八町一氣に巡るつばくらめ

# 当月集

鈴木 榮子選



○ 植竹 惇江

雛飾る匂ひ袋のほのかなる

側々と高砂人形に雛の灯

芽木の雨詩語の雫をこぼしけり

寒牡丹朱塗りの筆の書きごこち

眠りよりさめし目高を数へけり

○ 横田 初美

善女ぶりしてお涅槃に合掌す(田福寺二句)

涅槃寺酌婦の墓も詣でけり

夫の背に日の当りぬる接木かな

いづれかが杖となるらん青き踏む

しばらくは表紙染しむ春ともし(記念号)

○ 中村 春宵子

喫水の浅き渡船や猫柳

浅草のレトロ口通りや日脚のぶ(伝法院通り)

恋猫に相思相愛云ふがあり

銀ブラの目抜きも路地も臍かな

踊り子の街道筋や吊し雛

○ 市川 玲子

ひさかたの雨のめぐみや梅含む

初雛をんな四代かしましや

うからてふぬくみに癒す春の風邪長身婦高居て

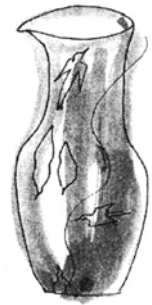
出羽三山の息吹きいたたく猫柳(左配使われど)

春の妖精トウランドット舞ひ納む



# 春燈の句

鈴木 榮子選



宿酔やざくざく刻む葱白き

福島 生方 義紹

業平の名前の蛭買ひにけり

諍ふも絆のうちや葛湯吹く

木の芽吹く上野の森の至宝の書

春立つや刻苦勉強死語ならず

水芹に盈虧の光を鏤めし

東京 入澤 正

春寒し家路を星のいざなへる

人工海岸浅蜷の句となりにけり

路の薑熊の眠りを覚しけり

福島 物江 康平

恋人岬の鐘春愁をひろめけり

存へて地の塩たらむ西行忌

雛壇の雛にも齡見えにけり

引き込まれゆく北越雪譜炉辺あかり

料峭や豊漁にぎはふ万祝着

神奈川 松波とよ子

待ち侘びて寡男の飾る雛かな

春されや源氏絵巻の彩の綾

椰子林をのどかに洗ふメクロン河

バンコク 大口 憧遊

竜天に登る応挙の竜も天

舟並べ物売り迫る春の市

良寛の仮名解かれざる金縷梅

春日や絵付け黙々タイ娘

先達の踏みし敷石春燈（祝）

東京 池本 敏恵

久々の故国の春は肌を刺す

笹鳴きや誰ぞ訪なひの予兆なる

この手焙り抱きぬし父の謡講

東京 腰高 和代

花泊夫藍見せばやの子は遠き国

春耕に鋤を担いで修道女

日脚伸ぶ銀座に仏蘭西人形展

# 余言

鈴木 榮子

目も二丁目も、七丁目も八丁目も本銀座です。

芽木の雨詩語の雫をこぼしけり

植竹 惇江

芽木の雨は全く言葉の雫のようです。芽木からこぼれる透明な雫の言葉。しかし、言葉ほどこわいものはありません。沈黙は金と言いますが、沈黙は石にもなりかねません。そう思えることもあります。十七字の俳句でよかったーと思つてます。もし詩だったらきつと書きすぎて自分で自分を傷つけるでしょう。朝、目が覚めたとき、またコートのポケットに手を入れているとき、無意識に五指を握っていること気がつきます。

急いで五指を軽く開き解放します。

日常の受け答えにもまごころの雫をこぼせるように伝えたいです。

畳屋の今年限りの針供養

前原早智子

この句によると、畳屋さんが機械化されて、独特な畳の締上げの針を使う仕事がなくなることがよく分かります。肘に当て布をして一針一針締上げていた姿をよく見ました。

機械化されて美しく統一された畳屋作業も時代にそくして楽になったと思います。また日本間そのものもむしろ、特別の用途好みの部屋となりました。

(以下略)

喫水の浅き渡船や猫柳

中村春宵子

喫水線が浅いということは荷運び船でなく渡船でしょう。猫柳が配せられると早春そのものです。

先月この作者に坂田藤十郎襲名の日本橋のお練りの句がありました。浅草仲見世や日本橋はお練りが似合う町です。

この句と並んで、

浅草のレトロ口通りや日脚のぶ

中村春宵子

銀ブラの目抜きも路地も臍かな

//

作者も日本橋、京橋、銀座で若い日を過ごした方なのでしょう。本銀座は四、五、六丁目という言い方もありますが、一丁